ふるさとづくり '97

（財）あしたの日本を創る協会編

ふるさとづくり '97

（財）あしたの日本を創る協会編

ふるさとづくり大賞

■集団の部
市民参加の防災まちづくり
東京都・国分寺市高木町生活会議

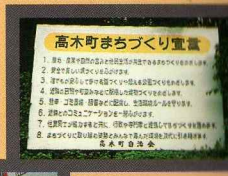
■市町村の部
小さな声から大きな公園づくり
熊本県・田浦町

ふるさとづくり賞

■集団の部
開かれた大学、自立する筑豊の実験
福岡県・住学協同機構「筑豊地域づくりセンター」

■市町村の部
夢と笑いの人づくり一人形劇との出会いと歩み
香川県・大内町

■個人の部
文化の町・御手洗を観光地にリード
広島県・長濱　要悟



ふるさとづくり奨励賞

■集団の部
仲間づくり・地域づくり
秋田県・荒町壮年クラブ

フレンドリープラザができるまで
山形県・グループ「山形こまつ座」（旧名：「先知らぬ」）

地域住民を巻き込んで商店街活性化
長崎県・森岳まちづくりの会

ふるさとのぬくもりを求めて民話を語る
大分県・仏の里の民話を語る会

■市町村の部
音楽による村づくり
新潟県・大島村

■個人の部
二人三脚の人形劇・行脚
徳島県・宮本　美恵子

集団、市町村、個人の 49 編を収録

定価　本体 1,000円（税別）

とに気が付きました。地元の受講者、メンバーに自信が出始めました。

川西町フレンドリープラザ誕生

平成6年夏、本のある広場と、こまつ座の公演活動に着目した川西町の積極的な働きかけで、劇場と図書館のある建物「川西町フレンドリープラザ」が建ちました。劇場は、座席数700の本格的な劇場専門ホールです。今までは「舞台に釘を打つな」という演劇に理解のない会場側の言葉に、何度ももどかしい思いもしましたが、この劇場の勲章は舞台に刻まれた釘跡です。そして、遅筆堂文庫には、井上氏蔵書10万冊の本が並びました。私たちが理想とした劇場、図書館の誕生。グループが活動を開始して20年、こまつ座の演劇を呼んでから10年目のことでした。

人口わずか2万人の町にできたこの劇場は、こまつ座の演劇を見続けてくれたお客様のパワーが生み出したものです。そして、そのパワーを見極めた川西町の手腕のおかげでした。

井上ひさし氏との出会いが演劇との出会いになり、地域住民を巻き込んで劇場が誕生。その劇場では、こまつ座ばかりではなく、いろいろな芝居、歌、映画が公演、上演されています。

（遠藤　征広）

主催者賞（ふるさとづくり奨励賞）

地域住民を巻き込んで商店街活性化

長崎県島原市・森岳まちづくりの会

サビレタ商店街に雲仙普賢岳噴火災害

島原市の中央に位置する島原城は旧称を森岳城という。森岳城のすぐふもとには、私鉄島原鉄道の島原駅があって、そこに広がる森岳商店街は、昭和30年ころまでは島原半島一の繁華街として栄華を極めたそうである。ところが、車社会へと変化していく時代の流れの中で森岳商店街も、全国によくあるサビレゆく駅前商店街の運命をたどり始めたのであった。

「このままじゃいかん！何とかせねば！」と商店街の会長は、若手後継者を召集して一席を設け「青年部」を結成した。皆大いに盛り上がり、危機感を持って「このままじゃいかん！何とかしよう！」と思った。とにかく、三日坊主にならぬよう、毎月3日に寄ろうということになった。それは平成3年5月のことだった。

そして、記念すべき第1回青年部の会合は6月3日であった、ところが忘れもしないあの

大火砕流の大惨事と重なり、それからは悪夢のような日々が続いた。会合どころか、何人もの市民が逃げ出し、消費者は買い控え、ただでさえ景気の悪かった森岳商店街の各店には厳しい試練が待っていた。今までの倍働いて、稼ぎは今までに追いつかない。直接の被災地ではないから援助はない。疲れた体にムチ打って降灰を取り除く、やっときれいにしたと思ったらまた灰が降る、また水をまく。文字通り泥沼の日々、悪戦苦闘の毎日が続いた。

本物の危機感

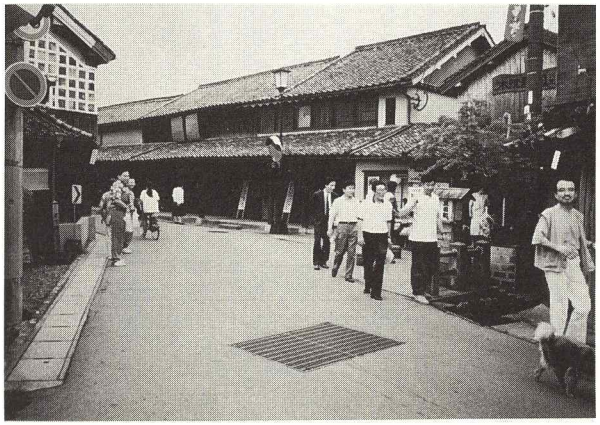
半年後、死線を乗り越えてきた森岳商店街青年部は再び結集した。「このままじゃいかん！何とかせねば！」言葉は同じだが、その重みは十倍も百倍も違っていた。それから私たちは、連日深夜まで議論を重ねた。金銭的にも、時間的にも、精神的にもゆとりは無かったが、かえってアルコール無しでもいきなり皆本音で話し合えた。危機感があったから皆個々でやらねばならないこと、一緒になってやらねばならぬことの区別が良くわかっていた。午後8時の会合時間に遅れてくる者がいても、誰も彼を責めなかった。彼は晩ご飯も食べずに仕事をかたずけて、駆けつけてきたことを知っていたからである。

当時、私たちが描き出した構想は、「やがて噴火が収まれば、全国から観光客が溶岩ドームや火砕流のあとを一目見ようと、どっと押しかけてくる→島原城近辺にも観光客が来るだろう→その観光客を捕まえよう、歴史と文化の香りを漂わせ、観光客も受け入れられる商店街になろう！」というものだった。それから私たちの活動は一気呵成であった。

先進地の視察研修

毎月3日、夜の例会で議論を重ね、まず「視察に行こう」ということになった。観光といえば大分県の湯布院がすごいらしいと、森岳商店街青年部は、視察先に湯布院を選んだ。事前に電話や手紙などで連絡を取り、3人の現地講師を手配して旅のしおりを作成した。何を聞こうかとさんざん議論をし、箇条書きの質問状を先方に郵送した。単なる物見遊山にしないぞという強い意志がそこに働いていた。そして3台の車に分乗し初めての視察旅行（1泊2日）に出発した。平成4年の夏である。

湯布院のまちづくりの先輩たちは、私たちの熱意に応えてたくさんの重要なことを教えてくれた。莫大な資本をかけるでもなく、何人かの



先進地視察研修

地域を愛する人たちの情熱で、湯布院の街は動いていた。自分たちも頑張れば出来るかもしれないという手ごたえを感じて凱旋した。そして、分厚い報告書も作った。その後も必ず事前調査をし、先方で実際に頑張っている人に話しを聞く、報告書を作る。このやり方で、翌平成5年は熊本市の新町、6年に大分県日田市豆田町、7年は滋賀県の彦根・長浜と、いずれも私たちの森岳地区の参考になる場所を選んで、毎年視察を継続した。

森岳青空文化祭

「子どもたちに伝えたい昔あそび」をテーマに、平成4年秋小さなイベントを実施した。サビレゆく商店街の青年部が、初めて世に問うた第1回の小さなイベントは、私たちの結束を強め、楽しくやっていけるという感触を与えてくれた大きな一歩となった。

タケとんぼ作りに、子どもたちの歓声が青空にこだまし、継続する噴火災害の降灰の合間

青空文化祭の開会セレモニー

の明るい話題として、地域の人たちに受け入れられた。

観光イラストマップが活動の資金源に

私たちは、休むまもなく温めていたつぎの企画に乗り出した。観光おみやげ用イラストマップの製作と販売である。一つは、島原の歴史的文化遺産である「寛政の島原大変図」は、松平文庫に所蔵されているが、これに似せて、この度の雲仙岳災害を記録した「平成島原大変図」と、島原の観光名所をガイドするイラストマップ「うれっさたのっさ島原道中」の2種。この計画は観光客にも喜ばれ、活動資金も捻出できる一石二鳥のすぐれものだった。

みんなで手分けしながら調査をし、慣れない古文書を読み、仕上げは地元出身のプロのイラストレーターにお願いした。地元のテレビ局も取材に来られ30分番組（ウイラブ九州）で放映された。このテレビ出演を契機に、私たち森岳の劣等意識は逆に誇りに転化していったのである。この企画によって、地域の皆さんの支持と、地図やガイドマップの販売による幾ばくかの活動資金をも手にすることが出来たからである。

シニアアドバイザー派遣助成制度の活用

商工会議所の経営指導員から、「熱心に勉強しているようだね。いい制度があるから使って

みれば……」との紹介があって、私たちはすぐに飛びついた。

東京から来られたアドバイザーは、私たちの話をじっくり聞いて、島原の森岳地区に即したアドバイスをしてくれた。それは、「地域の人たちを巻き込んで、活動をしなさい」というものだった。商店街という狭い範囲の発展にこだわっていた私たちは、目からウロコが落ちた。

たしかに2年目の視察地、熊本市の新町は、まさに市民（一新まちづくりの会）と商店街が一体になって活動を進めていた。商店街の中に市民（お年寄り）が休憩できるバンコ（縁台）が並んでいるのである。商店街といえば、何かと消費に結びつく企画が多い中で心暖まるものであった。私たちはさっそく街なかにバンコを並べた。

阿波踊りがやってきた

第2回森岳青空文化祭・秋祭りに合わせて、本場の徳島県阿南市から、踊り連の一行が島原を元気付けにやって来てくれた。無理にお願いして、青空文化祭の会場でも踊りを披露してもらうように手配した。

阿南の踊り連の一行は、早朝からいくつかの老人ホームなどを慰問して踊りを披露し、昼からの祭りパレードでも踊りまくり、さらに各商店街も訪問してくれた。私たちの会場に着いたころは、へとへとになっておられた。会場に持ち寄っていた例のバンコをかき集めて、

まず腰をかけてもらって、用意していた飲食物を提供した。（あとで聞いた話しで、1日中立ちっぱなしで、特に女性は地べたに座り込むわけにもいかず、どこも歓迎して酒は振る舞ってくれるけど、森岳だけが座れる場所を提供してくれて本当にありがたかったとのことでした）。一休みした一行は、夕暮れていく青空文化祭の会場で、この日一番の踊りを披露してくれた。私の胸に熱いものがこみ上げてきた。見ると仲間の頬にも光るものが流れていた。その後会場の全員が参加して総踊りになり、フィナーレとなった。

島原城に武者のぼりを上げよう！――「森岳まちづくりの会」誕生

平成6年になっても雲仙普賢岳の噴火活動は治まらず、私たちの地域上流部にまで被害が及び、島原はいよいよ元気をなくしていた。しかし、もう私たちは前に進むしかなかった。

「灰が降るからといって、何もしなければ何も生まれない。とにかくやろう！」。島原の元気印を全国にアピールしようと、島原城にコイのぼりを泳がせ、勇壮な武者のぼりを林立させよう！ということになった。

すでに商店街の枠を越えて、森岳地区を愛する何人かの市民が参加していた。役所に公有地（島原城）の使用許可を届けるに当たって、初めて「森岳まちづくりの会」（代表・村本雅一さん）の名前をつけた次第である。

武者のぼりが島原城にマッチして、このイベントは大きな反響を呼び、噴火でくじけそう

になっていた地域の人たちを勇気づけた。その後毎年回を重ね、今年3回目はさらにのぼりの数が増え、活動には会員以外のボランティアも多く参加するようになり、一大市民イベントとして定着しつつある。

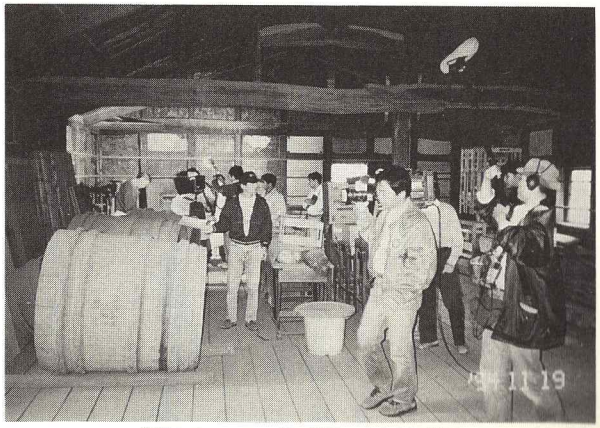
観光道案内運動と町並みウォッチング

「気軽に道を尋ねてください」のステッカーを貼り出して、観光客に道案内をかってでた。考えてみると自分たちの地域のことなのに、意外に知らないことが多い、そこで「島原ぶらりさる記」と称して町並みウォッチングを定期的に実施した。自信と誇りを持って取り組むから、知れば知るほどますます島原のよさが再発見でき、私たちの島原に対する愛着は並のものではなくなっている。とくに島原は「水」が素晴らしく、会を挙げて「水」の大切さを訴える様々な活動を展開している。

誇れるまちの誇れる仲間たち

少ない紙面で、私たちの仲間の素晴らしさを伝え切れないことが残念である。一人ひとりが自分のできる範囲で、自分の特技を生かし、相当量の仕事をこなしている。家族の理解はもらっても、家庭サービスができないことを責められながら、苦笑いしながら笑顔でイベントや会合に参加してくる。私は仲間たちからしばしば一人では決して味わうことの出来ない感動を与えてもらう。こんな仲間たちを私は心底から誇りに思っている。（松坂　昌應）

観光道案内ステッカー


街並みウォッチングで地元のよさを再発見